

# Lang-Tung, *The Decline and Fall of the British Empire* (1881)の復刻及び解題

橋本 順光

## Lang-Tung, *The Decline and Fall of the British Empire* (1881): Introduction and Notes

Yorimitsu HASHIMOTO

### 解題

#### 1881年の大英帝国衰亡史

ギボンの『ローマ帝国衰亡史』をふまえ、大英帝国衰亡史と名付けられた書物は、大英図書館の書誌目録を調べるかぎり、計六冊が出版されている。本稿で注を付して復刻した Lang-Tung, *The Decline and Fall of the British Empire* (1881)は、その最初の一冊にほかならない。

警世のパンフレットの常として、作者は匿名というほか詳しいことは不明である。ただ三十二頁の小冊子ながら、未来の歴史家がかつての大英帝国の衰退を語るという形式は、1884年、1905年の衰亡史でもそれぞれ踏襲されることとなった。一方、1890年の『大英帝国衰亡史』は、長編の冒険小説となり、第一次世界大戦後の1938年と、第二次世界大戦後の1975年の『大英帝国衰亡史』は、歴史評論として刊行されている。しかし、それら後に続く五冊の『大英帝国衰亡史』は、過去に書かれた同じ題名の衰亡史に直接言及することはなかった。それだけに、この六冊が描く大英帝国衰亡の歴史は、それぞれの時代において、なにが衰退の兆候とみなされたのか、英国の帝国意識をうかがう格好の史料になっている。

では、この1881年おそらくは8月に書かれた最初の大英帝国衰亡史はどのように構想され、どのような帝国意識を明らかにしているのだろうか。ここでは、先行する文献や同時代の文脈に言及しながら、簡単な解題をこころみることにしたい。

#### 後期ヴィクトリア朝の始まり グラッドストンの復帰とディズレーリの死

1938年に出版されたロバート・ブリフォーによる『大英帝国衰亡史』の冒頭は、英国史の書物に対する軽妙な皮肉から始まっている。つい最近までそのほとんどは1815年のウォーターローでの勝利までしか扱わず、従って、おとぎ話のように「そうして、みんなずっと幸せに暮らしました」といわんばかりに突然に終わるといっているのである<sup>1</sup>。たしかにナポレオンを打ち破り、宿敵のフランス帝国に代わって、大英帝国の覇権は揺るぎないものになるが、後に続く没落と危機についてはほとんど触れられていないというわけである。

しかし、中国人歴史家ラン・タンが、2881年の未来、すでに滅亡して久しい英国の歴史を教科書

として記したという設定のパンフレット『大英帝国衰亡史』(1881)は、いささか事情が異なる。そこで戯画的に描かれる未来の歴史は、大英帝国にとって考えられる限り最悪のシナリオとっていいだろう。

それによれば、南下するロシアによって、アフガニスタンはロシア支配を受け入れ、さらにはインド、トルコ、ペルシアまでもがロシア領となってしまう。エジプトはフランス領となり、南アメリカでは帝国の支配を脱して南アメリカ共和国が成立する。チベットとビルマは中国領となり、カナダはといえば英国を見捨ててアメリカの傘下に入ってしまう。一方、英国では女性の社会進出が認められ、女性が首相となった結果、政治は混乱し、経済も悪化、ついには革命が勃発する。アイルランドでも蜂起がおこり、王族はオーストラリアへと亡命しなければならなくなる。

そんな革命後の英国では内乱と無秩序がはびこるが、そこへ大地震がロンドンを襲い、さらにメキシコ湾流か地軸の変化で気候が激変、文明は完全に消滅し、国土は森でおおわれてしまう。そうして、毛皮をまとい、ビールとボクシングを好むばかりの英国人に、中国の宣教師たちがキリスト教と文明を教えるようになる。この『大英帝国衰亡史』(1881)は、そんな中国政府の慈善行為をほめたたえ、後世の中国人の目から、かつて繁栄したらしい英国の栄光を、断片だけ残った事実から間違いだらけに推論してみせるのである。

こうした悪夢のような未来を語る小冊子は、そもそも後期ヴィクトリア朝に特有の流行だった。それはまた、ヴィクトリア朝の未曾有の繁栄を支えた人々が、1870年代において老いと死を迎え始めたことと無関係ではないだろう。

例えば、その一つに政治家の世代交代がある。その交代が、作中ではなかなか軽妙に対比されているので紹介したい。この本によれば、ヴィクトリア朝の代表的な政治家としては、ピール(1788-1850)、パーマストン(1784-1865)、グラッドストーン(1809-1898)、ディズレーリ(1804-1881)が挙げられている。ピールとパーマストンは、十九世紀前半の砲艦外交を支えた首相であり、刊行当時の段階ですでに没して久しい状態だった。一方、十九世紀後半に帝国主義政策を積極的に推進したディズレーリは、本パンフレット刊行の直前、1881年4月に逝去したばかりだった。ディズレーリの帝国主義政策を批判して、総選挙で大勝し、1880年から首相をつとめることになったグラッドストーンにしても、本書の刊行当時で72歳という老体である。スエズ運河、南アフリカ、アフガニスタンと、衝突を厭わず海外に介入したものの、グラッドストーンに失策と不況とを批判され、1880年に引退し、翌年には死没というディズレーリの姿に、一つの時代の終りが予感されたことは想像に難くない。そんな終焉の予感が、ここでヴィクトリア朝を代表させられている四人の政治家からうかがうことができる。

同時に『大英帝国衰亡史』(1881)では、ヴィクトリア朝のあとのエドワード朝において、時代を代表する政治家も予測されている。そこでは、ハーティントン(1833-1908)、ジョゼフ・チェンバレン(1836-1914)、そしてチャールズ・ディルク(1843-1911)の三人が挙げられている。これは当時として順当な予想であった。ハーティントンは自由党総裁で、チェンバレンは党内急進派の筆頭、ディルクもまた党から将来を囑望されていたからである。また、ディズレーリ内閣退陣後に組織された第二次グラッドストーン内閣で、ハーティントンはインド国務相、チェンバレンは商務院総裁、ディルクは外務次官と、三人とも要職を占めている。この三人が、大英帝国の衰亡をもたらすことになる未来のエドワード朝の代表的な政治家として言及されるのは、グラッドストーンによる反ディズレーリ、反帝国主義政策への皮肉とも考えられるかもしれない。

しかし、もしそうだとすれば、もっと皮肉なのはこのあとの歴史の方だったといえる。このパンフレットの刊行から五年後の1886年に、首相候補と目されていたディルクは離婚問題であえなく失脚してしまう。同じ年、ハーティントンとチェンバレンはといえば、アイルランド自治法案をめぐる首相のグラッドストーンと対立し、自由党を離れて、自由統一派を結成する。チェンバレンは、さらに積極的な帝国主義政策を推進し、ニュー・インペリアリズムの中枢を担うことになる。したがって、この『大英帝国衰亡史』で主な政治家として言及されるのは、半ば的を射ており、半ば外れたということになるだろう。

むろん、これは後知恵にすぎない。しかし、グラッドストーンによるディズレーリ批判にみられるような帝国をめぐる論争が、このパンフレットの成立に少なからぬ動機を与えたのは確かだろう。ディズレーリの死と老グラッドストンの復帰は、後述する帝国各地での反乱運動とともに、ヴィクトリア中期までの繁栄と覇権が終わり、新たな時代が始まろうとしていることを感じさせずにはいられなかったともいえる。それでは帝国の問題が当時どのように論じられたのか、未来の歴史を記すというパンフレットの設定に注意しながら、具体的にみえてみることにしよう。

### 大いなる期待 グレーター・ブリテンとグレート・ゲーム

まず、『大英帝国衰亡史』という題目そのものがはらんでいる問題について考えたい。そもそも英国において、多くの人々が積極的に帝国について議論すること自体が、大量に雑誌・新聞・書物が出版されはじめた十九世紀後半の一種特異ともいえる現象であった<sup>2</sup>。ケンブリッジの歴史家シーリーが『英国膨脹史』(1883)のなかで、ほんやりしたままいつのまにか世界に植民地をもってしまったという有名な言葉を残す一方で、イングランドでは大英帝国の存在が等閑視されすぎていると批判したのは、その点で興味深い。なぜなら、大英帝国が陰りだしたからこそ、帝国の堅持や防衛が言論の場で明確に意識され、帝国意識が涵養されるようになったと考えられるからである<sup>3</sup>。

実際、「大英帝国(British Empire)」という名称は、1880年代に入るまではあまり一般的に使われることはなかった。例えば、先の政治家ディルクは、1866年から翌年にかけて世界を周遊し、その記録『グレーター・ブリテン』(1870)を刊行して大きな話題をよぶことになる。そのなかで、世界中にひろがる英語圏とヴィクトリア女王の忠実な臣民たちを紹介し、アメリカを含めて、その支配の及ぶところは、最盛期のペルシア帝国やローマ帝国の約五倍であり、百年後の1970年には英国人だけでも三億人になっているだろうと空前の繁栄を謳歌してみせた<sup>4</sup>。しかし、そこでも過去の帝国との格差が強調されるだけで、帝国という言葉はほとんど使われていない。事実、人口に膾炙するようになったのは、その書名である「グレーター・ブリテン」であった。大英帝国という呼称は、過去の滅び去ったさまざまな帝国を想起させずにはおかないからだろう。

そうした帝国への拒否反応がうかがえる事件として、1876年の国王称号法制定をめぐる大論争が挙げられる。ロシアの南下を警戒し、インドを正式に植民地として組み込むため、ディズレーリはヴィクトリア女王にインド皇帝("Empress of India")の称号を加えることを提案する。ディズレーリ自身、皇帝という称号は「イングランドにそぐわない("un-English")」<sup>5</sup>という意見があると下院で言及せざるをえなかったように、グラッドストーンやハーティントンは慎重論を下院で唱え、雑誌などにも「アジア的な尊敬表現を連想させる」<sup>6</sup>といった反論が多く寄せられたのであった。グラッドストーンは、ギボンに言及しつつ、皇帝はもともと軍の称号であり、マルクス・アウレリウスのような賢帝がいつもいるわけではないことを力説して、ディズレーリに激しく反論したのである<sup>7</sup>。

こうして下院が分裂したまま法案は押し切れ、翌 1877 年に、ヴィクトリア女王はインド皇帝を兼任する。この『大英帝国衰亡史』という題目のパンフレットは、グレート・ブリテンなり、グレート・ブリテンもまた、その空前の偉大さにも関わらず、ギボンが描いた帝政以降のローマ帝国と同じ轍を踏むのではないかという不安があってこそ生まれたといえるだろう。先のディルクは、政界での失脚以降も多くの優れた著作を発表し続けるが、その書名は、『グレート・ブリテンの諸問題』(1890)、『大英帝国』(1899)と続く。これは、1880 年代以降、「グレート・ブリテン」の衰退の阻止から「大英帝国」としての堅持へと、事態を楽観していたディルクでさえ帝国を意識せざるをえなくなるという過程でもある。「大英帝国衰亡史」という題目を最初に冠した書物が 1880 年代に登場したのは、帝国がキーワードになりはじめた当時の思潮と切り離すことはできない。

もっとも、この『大英帝国衰亡史』(1881)でなぞらえられているのは、ギボンによる題名だけであり、ローマ帝国の没落を促したとされる、例えば若者を蝕む奢侈についてはほとんど言及がない。そんなローマ帝国の衰退が大英帝国の反面教師として積極的に参照されるようになったのは、エドワード朝になってからのことであり、実際、1905 年に発行された『大英帝国衰亡史』はその好例となっている<sup>8</sup>。対照的に、1881 年に刊行された『大英帝国衰亡史』では、ロシア、フランス、アメリカといった列強たちとの競争に敗れて、没落がひきおこされることになっている。たしかに、当時、大英帝国の覇権を脅かしはじめた要因として、ロシアの南下、フランスのアフリカ進出、そしてアメリカの急成長はけっして無視できない。南下するロシアに対して、英国が各地でとった競合はグレート・ゲームと呼ばれて名高いが、とりわけ本パンフレットでは、先にみたようにロシアの脅威がいたるところに書き込まれている。

しかし、ロシアの脅威だけでなく、帝国の各地で高まるナショナリズムの波にも、英国は苦慮することになる。そこで、簡単に当時の対外政策を確認しておこう。1874 年にディズレーリはスエズ運河の株をフランスから買収することに成功するが、本書の書かれた直後、1881 年 9 月にはエジプトでアラビー・パシャの乱が起こり、親英政権が崩壊する。また 1877 年にはインド帝国が成立しているが、翌 1878 年にその西北にあるアフガニスタンで、第二次アフガン戦争を起こすものの苦戦し、ようやく 1880 年に首都カンダハールを陥落させている。そのころ、ロシアはカスピ海をこえて、アフガニスタン近くまで着々と鉄道建設を続けており、アフガニスタンを保護領にしておく必要があったのである。一方、アフリカでは、1877 年に併合したトランスヴァールでボーア人が反旗をひるがえし、第一次ボーア戦争(1880-1881)を行うが戦いは敗北に終わる。1881 年 3 月に、グラッドストーンは独立を承認せざるをえなくなってしまうのである。そして、アイルランドからは 1870 年代を通じて、パーネルがアイルランド自治法案を通過させようと運動し、その承認は帝国の崩壊につながるとして恐れられつつも、グラッドストーンは妥協することで事態を好転させようとしていたのだった。

『大英帝国衰亡史』(1881)の描く帝国の滅亡は、こうした当時の内憂外患をふまえ、それを巧みに誇張していることがわかる。女性の社会進出や、石油危機ならぬ石炭危機と労働者争議が、当時の保守思想においてどのように反発されていたかも、その悪意ある戯画が示すとおりである。これはまた、グラッドストーンによる宥和的な政策の失敗への過分な警鐘とみなして差し支えないだろう。

## 地球の裏側からたみ世界 植民地と母国の逆転

1880 年代において大英帝国の維持という問題が前景化されたことと同時に見逃せないのは、1870 年代から始まる架空未来戦記小説の流行である。I・F・クラークがその画期的な研究で明らかにし

たように、1873年にチェスニーの『ドーキングの戦い』という小論が公刊され、このジャンルはその後、急成長をとげる。ナポレオンの悪夢を誇張し、英国がヨーロッパ大陸から侵略される未来を描くことで、戦争への備えを主張するこれらの小説群は、ブリフォーが皮肉った歴史書たちと対をなす存在ともいえるだろう。『大英帝国衰亡史』(1881)もまた、英国の植民地が侵攻され、没落するという架空の未来を描いている点で、まさしくこれらの系譜に立つものである。事実、クラークの研究書は、巻末に浩瀚な未来戦記小説のリストを掲げているのだが、この小冊子もそこでしかるべく言及されている<sup>9</sup>。これら先行する未来戦記小説が主に英国への侵略を描いたのに対して、『大英帝国衰亡史』(1881)は、それを世界中に広がる帝国の規模で描いた点に独自性があるといえるだろう。しかし、『大英帝国衰亡史』は、『ドーキングの戦い』の磁場のなかにもありながらも、それに先行するもう一つの系譜にむしろ連なるものといえる。

それは、前期ヴィクトリア朝を代表する政治家かつ歴史家T・B・マコーレーが、1840年に夢想した英国の未来である。彼は、ランケの教皇史についての書評のなかで、「ニュー・ジーランドからの旅人が、廃墟のセント・ポール大寺院をスケッチしようと、広大な荒野のなか、壊れたロンドン橋の上でたたずんでいる」、そんな未来にあっても教皇制度は変わらず存続しているかもしれない」と記した<sup>10</sup>。この廃墟の英国を訪れるニュー・ジーランド人という主題は、発表当時であっても、それをふまえた演説や記事が週に数回はみられるほど衝撃を与えたという<sup>11</sup>。

『大英帝国衰亡史』(1881)で、革命の後、王族たちがオーストラリアへと亡命し、そこで英国からの独立を宣言するというくだりは、そんなマコーレーの夢想の末裔といえることができるだろう。実際、1881年以降の『大英帝国衰亡史』には、地球の反対側から、没落して廃墟と化した英国で思いを馳せるといふ主題が見られるのである。例えば、1884年の『大英帝国衰亡史』は、北京ならぬニュー・ジーランドのオークランドで2884年に出版されたという設定であり、1890年の『大英帝国衰亡史』は、オーストラリアから廃墟の英国を訪れた男たちの冒険小説となっている<sup>12</sup>。

そうした廃墟での夢想という点で、『大英帝国衰亡史』(1881)において注目すべきは、1000年後の中国人歴史家が、英国の過去を誤って復元してしまうところだろう。先に掲げたヴィクトリア朝を代表する政治家は、“Lord Peeli, Lord Pummicestone, Mr. Glasston, and Lord Dizzy”と記され、エドワード朝の場合には“Marqus (sic) Haughty-tone, Sir Chamberlinen, and Sir Dilkey”と、ささやかな悪意をもって綴り間違えられている。そして、ナポレオンをウォータールーで打ち破ったウェリントンに到っては、ウェリントン・ブーツこと長靴と誤解されてしまっているのである。

こうした過去の復元が陥ってしまう誤りを風刺に生かしているのは、『大英帝国衰亡史』(1881)の軽妙な持ち味といえるが、これはヴィクトリア朝における考古学の隆盛と無関係ではない。考古学と前述のマコーレーの主題とは連動することになるのだが、例えば、その一つに詩の「ニネヴェの重荷」(1856)がある。これは、1850年代初頭にあったオースティン・ヘンリー・レイヤードによるニネヴェ発掘とその大英博物館での展示に触発されて、ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティが書いたものである<sup>13</sup>。そこで、ロセッティは、「ロンドンとニネヴェ/どちらが古かったかと問われるような/最良もしくは最悪の未来」(168-170行)<sup>14</sup>を夢想してみせる。そのとき、大英博物館に運び込まれた巨大な人面牛の彫像は、再び砂に埋もれ、

オーストラリアのどこかの部族が彼を掘り起こし  
遠くへ運び去ってしまうだろう そのときには

ニネヴェではなくロンドンの遺物として！ (178-180行)

と、ニネヴェの石像がロンドンの遺跡から発掘される未来を想像し、それがロンドンの彫像として誤解されてしまうのではないかと記した。マコーレーが思い描いた地球の裏側からの旅人という主題が、ここでも繰り返されているのである。『大英帝国衰亡史』(1881)は、そんなロッセティの廃墟趣味を、風刺の道具として巧みに流用していると考えることができよう。

しかし、これらの書物は、地球の裏側である対蹠地という「さかさまの世界」を文字通りの比喩にして、英国と植民地の関係が逆転する未来を夢想するものであり、中国とは無関係である。その点で興味深いのは、この『大英帝国衰亡史』が出版されたのと同じ1881年に、当のニュー・ジーランドから来た男がロンドンで刊行した架空未来戦記小説である。そのウィリアム・ディライル・ヘイが描いた『三百年後』は、『大英帝国衰亡史』と実に対照的な関係にある。『大英帝国衰亡史』が、文明化し、キリスト教化した中国という未来を描いたのに対して、『三百年後』は、中国人を始めとするいわゆる有色人種の増加にともない、優れた白色人種が生存できるよう有色人種の「大根絶(“Great Extermination”)」がおこなわれる未来を、具体的な数字と表を交えながら記述してみせた<sup>15</sup>。ここでは、中国に対する彼我の認識がおおきく食い違っている。次節では、この点についてみてみることにしたい。

## 中国 マンダリンの首振り人形の国

1870年代から既に、アメリカや、オーストラリア、ニュー・ジーランドでは中国系移民の増加が問題となっていた。彼らへの反感は、『ドーキングの戦い』のような架空未来戦記小説と融合することになる。中国人によるアメリカの征服という未来を描くドナーの『共和国の末日』(1880)など、その最たる例である<sup>16</sup>。ヘイの『三百年後』も同じ趣向のものといっていだらう。そんな反中国系移民運動が高まるなか、アメリカは、『大英帝国衰亡史』が刊行された翌年、1882年には排中移民法を制定することになる。しかし、そんな中国系移民の脅威は、『大英帝国衰亡史』にはまったくみられない。チベットやビルマが中国領となった未来を描きながらも、当時、世界中に移動していった中国系移民についての記述は皆無なのである。自由貿易や生存競争という、これまでの「フェアプレイ」を揺るがせかねない脅威であるにも関わらず、オーストラリアやアメリカでチャイナタウンを見聞したディルクがいい例だが、1880年代においてさえも英国では楽観的な態度が多く、あまり深刻に論じられなかったのであった<sup>17</sup>。

実際、この小冊子が刊行された1881年の英国においては、中国はまだまだ幻想の国であった。例えば1866年生まれでH・G・ウェルズは、さまざまな冒険を想像させてくれる地理学に興味があったと、少年だった1880年のころのことを回想し、「中国や日本というのは、たしかに絹や扇は立派だけれど、当時は笑いの種ぐらいにしか思っていなかった」と記している<sup>18</sup>。同じ頃、そんな想像の旅を描いた児童文学の傑作に、モルズワースの『かっこう時計』(1877)がある。主人公のグリゼルダは、かっこうに「インドやアフリカのような地理学のお勉強のような場所はいや」として、「マンダリンの宮殿に行きたい」と頼む。そうして広間の中国製の飾り棚にある「マンダリンの首振り人形の国」で、額くばかりの皇帝とともに少女は踊りを楽しむことになるのである<sup>19</sup>。

『大英帝国衰亡史』で描かれた中国もまた、こういった幻想と滑稽が入り交じった存在である。それは何よりも表紙が端的に物語っている。作者名の“Lang-Tung”は提灯(Lantern)の語呂合わせであ

り、彼が家庭教師をした皇太子の“Sing and Hang”は、歌ってぶらぶらすごす、という意味でもある。その中国語の著作を英語へと翻訳した者の名が同意を示す言葉 (“Yea”) というのも、おそらくは、こうした十八世紀以来の「マンダリンの首振り人形(“Nodding Mandarin”)<sup>20</sup>との連想が働いているに相違ないだろう。

そんな中国という視点から英国を風刺する手法はゴールドスミスにまで遡れるが、当時の中国学の知識を豊富に盛り込んだその『世界市民』(1762)と違って、『大英帝国衰亡史』では、中国という設定はほとんど生かされていない。中国は、英国を裏返しにしただけの、文明化したキリスト教国としてしか描かれていないのである。興味深いことに、先のマコーレーが1824年に残した一文のなかでも、同じようにして中国が選ばれている<sup>21</sup>。そこでマコーレーは、ナポレオンを撃退したウェリントンの事績が、ギリシアのイリアッドよろしく「ウェリントニアッド」として詩に詠まれるだろうと予言したのであった。1000年後の未来、中華帝国を改革しようとして失敗し、英国へ亡命した中国人と英国人の子孫リチャード・クオンティが、そんな詩を書くのではないかというのである<sup>22</sup>。『大英帝国衰亡史』の描く未来の中国では、ウェリントンはウェリントン・ブーツと混同されるのであるから、ここでもマコーレー以来の主題が巧みに継承されているといえるかもしれない。

このように英国の事情が中国で誤記され、誤解されるという点では、ウォルター・サヴェッジ・ランダーによる『中国の皇帝とチン・ティの対話』(1846)を想起してもよいだろう。そこでは、ニュートンとベーコンが中国風に“Nu-Tong,” “Pa-cong”と記され、英国のブーツの窮屈さが誇張して描かれているからである<sup>23</sup>。しかし、『世界市民』の直系ともいえるランダーの著作<sup>24</sup>では、当然のことながら、そうした誤読は主題ではなく、重点は英国の社会の不合理性を風刺することにある。それに対して、『大英帝国衰亡史』で描かれた誤解は、前節でみたように考古学を援用しながら、当て推量でもしなければわからないほど英国の事物が衰退し、摩滅してしまうという可能性を誇張したものと見える。これは英国の事物が、例えば中国のような東洋の国々で、類似しているがどこか違和感を覚えさせながら、奇妙に模倣され続けていたことと無関係ではないだろう。とはいえ、英国が使命と考えていた文明化とキリスト教化については、そっくりそのまま中国に受け継がれるものの、その継承について詳述はなく、あくまで英国の衰退を対照させるためでしかない。しかし、まさに本書の出版の年に、そんな模倣は、すでに笑うべき誤解であることを超えようとしていたのだ。

その端的な例が、『大英帝国衰亡史』と同じ年に、当時のセイロンはコロンボで出版されたオルコットの『仏教問答』である<sup>25</sup>。『大英帝国衰亡史』の対話形式が、キリスト教のカテキズムこと教義問答のパロディだとすれば、『仏教問答』は、それを逆用して仏教版に仕立て上げたものといえる。『大英帝国衰亡史』よりも短いわずか二十八頁の小冊子ながら、これは増補と増刷を繰り返し、何十カ国語にも翻訳され、汎アジア的な仏教復興運動を引き起こすことになる<sup>26</sup>。アメリカ出身のヘンリー・ステイル・オルコットは、神智学運動を起こしたロシア系アメリカ人のブラヴァツキーの伴侶であり、両者ともそれぞれに仏教を恣意的に解釈していることには批判はあるものの、二人のインドでの活動が、インドの独立運動に対して多大な影響を及ぼしたことは無視することはできない<sup>27</sup>。インドにおけるロシア南下の脅威を強調した『大英帝国衰亡史』であったが、帝国に編入されたばかりのインドの内側からも、しかもロシアとアメリカという大英帝国にとっては因縁の組み合わせである二人によっても、大英帝国の衰亡はゆっくりと始まろうとしていたのである。

一方、中国でも、曾國藩や李鴻章によって西洋の近代兵器や機械工業の導入を行う洋務運動がす

でに始められていた。1870年代の英国のジャーナリズムでは、そうした中国の文明化については冷ややかに限界を指摘するか、せいぜい英国主導の文明化の使命が再確認されるくらいであった<sup>28</sup>。ところが1887年、曾國藩の息子で、仏国公使であった曾紀沢が「中国 眠りと目覚め」という論考を英語で公刊するに至り、大きな衝撃を走らせることになるのである<sup>29</sup>。

このように1881年に出版された『大英帝国衰亡史』は、帝国主義を推進したディズレーリからそれを批判したグラッドストンの再登場という1880年における政治の大きな転換期にあつて、帝国を存続してゆけるのかどうかという不安を中国に投影した典型的なオリエンタリズムの産物といえるだろう。その中国は、想像と幻想を「提灯」のように忠実に写し出す点で、ちょうど中国語から英語へと翻訳したという設定の人物の名が“Yea”であるように、受諾を繰り返すばかりの受動的な存在としてもっぱら描かれている。しかし、中国を初めとする東洋の国々は、もはや首振り人形であることを止め始めていた。事実、『大英帝国衰亡史』にも、トランスヴァールほか帝国各地で起きていた民族運動や反英運動による帝国の分裂が書き込まれている。しかし、南アフリカを例外として、そうしたグレート・ブリテンの臣民たちの反乱は、例えばアイルランドに対する記述がそうであるように矮小化されているか、アフガニスタンやエジプトの未来を予測した記述が示すように、従来のグレート・ゲームの延長として、つまり西欧列強との代理戦争としてしかとらえられていない。本書の刊行直後にエジプトでアラビー・パシャの乱が起きたのは、東洋の臣民がもはや受動的な存在でなくなりはじめたことを示す象徴的な事件だったといえるだろう。

そうした『大英帝国衰亡史』にみられる帝国と臣民への見込み違いは、同じ年に刊行された対照的な二冊の書物と比較することで顕著にあらわれてくる。そしてその著者は、二人ともグレート・ブリテンに生を受けていた。英国の裏側にあるニュー・ジージーランド出身のヘイは『三百年後』(1881)で中国系移民の脅威を強調し、帝国の辺境であったセイロンではアメリカ人のオルコットが『仏教問答』(1881)を出版し、キリスト教の布教は裏返されて仏教の布教へと流用されようとしていたのである。そんな東洋における受容と変容は、『大英帝国衰亡史』においては英国の歴史や風習が中国風に誤読されるといった類にとどまっておらず、いまだ冗談の域を出るものではない。事実、こうした植民地で引き起こされた波紋に“Heart of the Empire”こと帝国の中心であるロンドンが揺れ動されることになるのは、1880年代後半以降のことであった。幻想と奇想に満ちた中国で東洋の賢者たちが交わす架空の対話という、十八世紀の啓蒙哲学以来の風刺の伝統が機能した最後の例の一つが、この『大英帝国衰亡史』といってもいいだろう。例えば六年後の曾紀沢の論説のように、東洋からの異議の声がロンドンの論壇に登場するようになってからは、対話はもはや予定調和に閉じられることはなく、むしろ果てしない反論と異論が往還するようになっていったからである。

末筆ながら、小論が科学研究費補助金基盤研究(C)「平井金三における明治仏教の国際化に関する宗教史・文化史的研究」(課題番号:16520060・研究代表者:吉永進一)による研究成果の一部であることを申し添えるとともに、各種資料の参照を可能にしてくれた大英図書館(British Library)、慶應大学図書館、一橋大学図書館、明星大学図書館、そして横浜国立大学参考図書係の方々に感謝の意を表したい。

- <sup>1</sup> Robert Briffault, *The Decline and Fall of the British Empire* (New York: Simon and Schuster, 1938), p. 3.
- <sup>2</sup> P. J. Marshall, “1870–1918: The Empire Under Threat”, in Marshall, *Cambridge Illustrated History of the British Empire* (Cambridge: Cambridge University Press, 2001), p. 54.
- <sup>3</sup> 先のシーリーの有名な言葉をふまえて、Bernard Porter は *The Absent-minded Imperialists* (Oxford: Oxford University Press, 2004) を刊行し、世紀転換期において帝国という用語が、いままで言われてきたほど頻繁に言及されているわけではないことを論証しようとした。しかし、素朴な実証主義に頼るばかりで、帝国意識が機能した可能性については十分に考慮されていない。
- <sup>4</sup> Charles Wentworth Dilke, *Greater Britain* (London: Macmillan, 1870), p. 572–573.
- <sup>5</sup> “Royal Titles Bill”, *The Times*, 10 March 1876.
- <sup>6</sup> “The Royal Titles Bill”, *The Times*, 20 March 1876. この記事では、そうした各誌の反論が紹介されている。
- <sup>7</sup> “Royal Titles Bill”, *The Times*, 10 March 1876. グラッドストーンによる同様の反論の書簡として、“The Royal Titles Bill”, *The Times*, 27 March 1876 がある。
- <sup>8</sup> 拙稿「*The Decline and Fall of the British Empire* (1906)とその抄訳『英国衰亡論』(1906)の復刻及び解題」, 横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅱ(人文科学) 7 (2005), 33–64、とりわけ p. 39, 注 7 を参照。なお、このパンフレットの作者が偽名として使ったヴィヴィアン・グレイは、ディズレーリの自伝的小説の主人公であり、ここにもディズレーリ時代への郷愁をうかがうことができる。
- <sup>9</sup> I. F. Clarke, *Voices Prophesying War: Future Wars, 1763–3749*, 2nd edition, (Oxford: Oxford University Press, 1992), p. 227.
- <sup>10</sup> T. B. Macaulay, “Von Ranke” in *Critical, Historical and Miscellaneous Essays*, vol. IV. (New York: Hurd and Houghton, 1875), p. 301.
- <sup>11</sup> “Macaulay’s Miscellaneous Writings”, *The Times*, 11 September 1860.
- <sup>12</sup> それぞれ、Edward Gibbon, *History of the Decline and Fall of the British Empire* (London: Field and Tuer; Simpkin, Marshall & Co.; Hamilton, Adams and Co., 1884) 及び Henry Crocker Marriott Watson, *The Decline and Fall of the British Empire* (London: Trischler & Co., 1890)。このマコーレー以来の系譜については、前者を復刻する際の解題で詳述することにした。
- <sup>13</sup> このロセッティの詩をめぐるレイヤードのニネヴェ発掘とその流用については、Frederick N. Bohrer, *Orientalism and Visual Culture: Imagining Mesopotamia in Nineteenth-century Europe* (Cambridge: Cambridge University Press, 2003), p. 169–174 に詳しい。
- <sup>14</sup> Dante Gabriel Rossetti, “The Burden of Nineveh”, *Poems* (London: Ellis and White, 1881), p. 170–79.
- <sup>15</sup> William Delisle Hay, *Three Hundred Years Hence; or, A Voice from Posterity* (London: Newman & Co., 1881), p. 271. この小説は I. F. Clarke, (ed.), *British Future Fiction*, vol. 2 (London: Pickering & Chatto, 2001) で復刻されている。なお、『三百年後』と『大英帝国衰亡史』(1881)の対照的な関係については、拙稿、“Germans, Body-politics and Yellow Peril: Relocation of Britishness in *The Yellow Danger*”, *Australasian Victorian Studies Journal*, 9 (2003), p. 54–58 でも触れておいた。
- <sup>16</sup> この *Last Days of the Republic* と当時の背景については、胡垣坤ほか『カミング・マン: 19世紀アメリカの政治諷刺漫画のなかの中国人』(村田雄二郎, 貴堂嘉之訳, 平凡社, 1997) に詳しい。
- <sup>17</sup> Dilke, *Greater Britain* (London: Macmillan, 1870), p. 343–346 などを参照。例外的にランケスターのような動物学者は、その『退化』(1880)の末尾で、興亡を繰り返す人類の歴史に触れて、ヨーロッパ人がホヤ類のように退化してしまう可能性を論じたが、そうした退化の不安が、英国の覇権の衰退とともに、H・G・ウェルズという格好の普及者を得て広がってゆくのは 1890年代に入ってからのことだった。William Coleman (ed.), *The Interpretation of Animal Form* (New York: Johnson Reprint, 1967) にある復刻 E. Ray Lankester, *Degeneration: A Chapter in Darwinism* (London, Macmillan, 1880), p. 118–119 を参照のこと。
- <sup>18</sup> H. G. Wells, *The Fate of Homo Sapiens* (London: Secker and Warburg, 1939), p. 5.
- <sup>19</sup> Mary Louisa Molesworth, *The Cuckoo Clock and The Tapestry Room* (New York: Garland Pub., 1976); p. 69–71.
- <sup>20</sup> Mandarin だけでもそうした首振り人形を指すが、OED によればその初出はボズウェル『ジョンソン伝』(1791)だという。

- <sup>21</sup> とはいふものの、マコーレーは『世界市民』自体は高く評価していた。拙稿、「中国人からの手紙:オリヴァー・ゴールドスミスの『世界市民』にみる中国」,英米文化, 30(2001), p. 119 を参照。
- <sup>22</sup> T. B. Macaulay, "A Prophetic Account of a Grand National Epic Poem, to Be Entitled "The Wellingtoniad," and To Be Published A.D. 2824" in *Critical, Historical and Miscellaneous Essays*, vol. I. (New York: Hurd and Houghton, 1875), p. 158-159.
- <sup>23</sup> それぞれ、*The Complete Works of Walter Savage Landor*, vol.9 (New York : Barnes & Noble, 1969), p. 8 と p. 15 を参照。
- <sup>24</sup> ランダーもまたゴールドスミスの系譜に立っていることについては、すでに Raymond Dawson, *The Chinese Chameleon* (London: Oxford University Press, 1967), p. 34, p. 206 で指摘されている。
- <sup>25</sup> Henry Steel Olcott, *A Buddhist Catechism* (Colombo, Ceylon: Theosophical Society, Buddhist Section, 1881)
- <sup>26</sup> 例えば 1889 年に、このオルコットを日本へと招聘した中心人物に平井金三がいる。Judith Snodgrass, *Presenting Japanese Buddhism to the West* (Chapel Hill : University of North Carolina Press, 2003), p. 155 と吉永進一・野崎晃市「平井金三と日本のユニテリアニズム」, 舞鶴工業高等専門学校紀要, 40(2005), p. 126 を参照。
- <sup>27</sup> 川島耕司「植民地下スリランカにおけるミッションと反キリスト教運動」, 杉本良男編『福音と文明化の人類学的研究』(吹田 : 国立民族学博物館, 2002), p. 159-166 (2002)を参照。なお、この資料は、赤井敏夫氏にご教示・ご恵送いただいた。記して感謝したい。
- <sup>28</sup> 東田雅博『大英帝国のアジア・イメージ』(ミネルヴァ書房, 1996), p. 156-161 頁。他にも、例えば "Progress in China", *The Times*, 3 June 1881 などを参照。
- <sup>29</sup> Marquis Tseng, "China: The Sleep and Awakening" *The Asiatic Quarterly Review*, January, 1887. 当時の論壇への衝撃については、典型的な帝国主義者であったインド副総督のカーゾンでさえ認めざるをえなかったほどである。Curzon, *Problems of the Far East* (London: Archibald Constable, 1896), p. 311-312 を参照。

## Lang-Tung, *The Decline and Fall of the British Empire* (1881)の復刻

---

### 凡例

テキストは、大英図書館所蔵 Lang-Tung(本名不詳), *The Decline and Fall of the British Empire* (London: F. V. White, 1881) (全 32 頁)を使用した。

今日では用いない表記や誤植、用語の不統一も、史料という観点からそのままにしておいた。

なお、そうした誤植や固有名詞などについては、本文にアラビア数字で注を付し、巻末で補った。注の作成に際しては、*Encyclopaedia Britannica*, 11<sup>th</sup> edition (1910-1911)を主に用いた。

---

THE  
DECLINE AND FALL  
OF THE  
BRITISH EMPIRE.

BEING  
A HISTORY OF ENGLAND  
BETWEEN THE YEARS 1840-1981

Written for the use of Junior Classes in Schools.

BY  
LANG-TUNG,<sup>1</sup>  
PROFESSOR OF HISTORY AT THE IMPERIAL UNIVERSITY OF PEKIN, AND  
TUTOR TO THEIR IMPERIAL HIGHNESSES THE PRINCES  
SING AND HANG.<sup>2</sup>

Translated into the English Language by  
YEA,<sup>3</sup>  
PEKIN, 2881 A.D.

LONDON  
F. V. WHITE AND CO.,  
31, SOUTHAMPTON STREET, STRAND.  
1881.

*(All Right Reserved.)*

PRICE SIXPENCE.

## P R E F A C E

THIS work is, as its name implies, a history of England during the little-known period extending between the years 1840 A.D. and 1981 A.D.

In spite of its small size, the author has expended more time and trouble over it than the casual reader might suppose. It is written chiefly for children ; but the author trusts and believes that students of maturer age will find it useful.

In conclusion, he begs to state that every pains have been taken to ensure absolute accuracy, or the nearest approach to it, both in the description of events, and in the dates given.

LANG-TUNG.

PEKIN, *August*, 2881 A.D.<sup>4</sup>

## CHAPTER I.

- Q. WHEN did Queen Victoria ascend the throne of England?  
 A. About the year 1835.<sup>5</sup>
- Q. What do you know about her?  
 A. She was a good and very popular Queen.
- Q. What was the name of the Capital of the British Empire, and what is said to have been its population?  
 A. Lomdon or London<sup>6</sup> ; and it is reputed to have had four millions of inhabitants.<sup>7</sup>
- Q. Is not this probably a gross exaggeration?  
 A. Yes. It is not likely that its population ever exceeded half-a-million.
- Q. Were not the possessions of Great Britain very large at this time?  
 A. Yes. She was Mistress of India<sup>8</sup>, Australia, nearly half the continent of North America, and a large part of South Africa.
- Q. How was it that a small country like England succeeded in attaining to such power? A. England's success was partly due to the skill and courage of her sailors, which long made her Mistress of the Seas ; the bravery of her soldiers, the industry of her people, the richness of the country in coal and iron mines, and partly to the constant wars and dissensions of the other European Powers, which, by preventing them from developing their industries, enabled England to become, for a time, the chief manufacturing and commercial nation in the world.
- Q. Was there not, in this reign, a great war between China and Great Britain?  
 A. Yes.
- Q. How did it originate?  
 A. The Chinese Government forbade the introduction of the poisonous drug opium into their Empire ; and as the English, who were the chief opium traders, disregarded this edict, a number of their vessels were seized by order of the Chinese Executive, whereupon the British Government declared war, and sent a large fleet and army to China.
- Q. Which side was victorious?  
 A. The Chinese ; they defeated the British in several battles, inflicting upon them a loss of over 10,000 men in killed and wounded.<sup>9</sup>
- Q. Was not the Chinese loss remarkably small?  
 A. Yes. Their troops were so well handled that they are said only to have lost five men killed and ten wounded in the whole campaign, or about one killed and two wounded in each battle.
- Q. How did the war terminate?  
 A. The Chinese became weary, at length, of slaughtering the British ; and making peace with them on easy terms, suffered the remainder of them to return to England.
- Q. Were not the British people deceived in a very artful manner as to the result of this campaign?  
 A. Yes. The British generals, with a view to concealing the truth, swore publicly that their armies were Victoria's.
- Q. Why did they do this?  
 A. To escape the punishment the British always bestowed on their unsuccessful officers.
- Q. Was there any other war?  
 A. Yes. A war with Russia, called the Crimean War.<sup>10</sup>
- Q. What was the cause of this war?  
 A. The Russians, who were anxious to get Constantinople, attacked Turkey, and England and France sided with the latter Power, and enabled her to repel the Russian attack.
- Q. What important facts did this war illustrate?

- A. That England had few soldiers but plenty of money, and that Russia had plenty of soldiers but little money.
- Q. What was the Irish plague?
- A. A horrible species of homicidal mania, which attacked considerable numbers of the most vicious part of the Irish population.
- Q. What were the victims of this plague called?
- A. Fiendians<sup>11</sup> ; and the plague itself was styled the fiend-mania.
- Q. How did this terrible mania display itself?
- A. The wretched maniacs used to prowl about, and stealthily assassinate defenceless people. They blew up several ships and buildings with dynamite<sup>12</sup>, and they maimed and mutilated cattle whenever they had a chance of doing so without being discovered ; and so subtle and crafty were they, that it was most difficult either to prevent these outrages or to detect their perpetrators.
- Q. How was the plague arrested?
- A. The people all over the country formed themselves into vigilance committees, and with their assistance several hundreds of miserable creatures who displayed symptoms of the insanity were arrested and lodged in asylums ; when a proclamation was issued to the effect that for every Fiendian outrage that followed, one or more of these hostages would be executed.
- Q. Was this plan successful?
- A. Yes. Not a single outrage occurred after the publication of this proclamation.
- Q. Who were Queen Victoria's chief ministers?
- A. Lord Peeli, Lord Pummicestone, Mr. Glasston, and Lord Dizzy.<sup>13</sup>

## CHAPTER II . EDWARD VII .

- Q. WHO succeeded Queen Victoria?
- A. Her eldest son, the Prince of Wales, under the title of Edward VII.<sup>14</sup>
- Q. Was he not a popular Prince?
- A. Yes. Very much so ; and he seems, besides, to have been both able and accomplished.
- Q. What great undertaking was completed in this reign?
- A. The construction of a railroad by Russia<sup>15</sup> between Mihailovsk<sup>16</sup> and Candahar.<sup>17</sup>
- Q. Did the British Government approve of the construction of this railway?
- A. No. On the contrary, they protested most energetically against it.
- Q. Did they do anything else?
- A. Yes. They sent four well-armed commissioners, at a salary of £ 1,000 per annum apiece, to remonstrate with the Ameer of Afghanistan.<sup>18</sup>
- Q. Was their mission successful?
- A. No. The Ameer fell upon them with a large army, and killed them all four.
- Q. What did the British Government do then?
- A. They let the matter drop.
- Q. Who were the chief British statesmen at this time?
- A. Marqus<sup>19</sup> Haughty-tone, Sir Chamberlinen, and Sir Dilkey.<sup>20</sup>
- Q. What great change was made in the British Constitution at this time?
- A. The abolition of the House of Lords, and its replacement by an Upper House composed of 300 super-annuated statesmen, Government officials, and members of Parliament.
- Q. Was there not also a change in the religious feeling of the country?

- A. Yes ; the Christian Church of England was disestablished, and though a large proportion of the people continued to live according to the tenets of Christianity, great numbers now openly professed themselves to be disciples of Mr. Wellington Boots.<sup>21</sup>
- Q. Who was Mr. Wellington Boots, and what were his doctrines?
- A. He was a great philosopher, who lived at Shoesboro. His tenets were that chastity was no virtue, marriage ridiculous, children a nuisance, and religion a sham.
- Q. What remarkable machine was invented in this reign?
- A. A flying machine, of which the motive-power was electricity, and which conveyed passengers through the air at the rate of eighty miles an hour.
- Q. What loss of territory did Great British experience about this time?
- A. Her South African colonies separated themselves from the empire, and formed themselves into a republic, called the South African Republic.
- Q. Why did they do this?
- A. Because Great Britain declined to assist them in a quarrel with the Boer Republic of the Transvaal.<sup>22</sup>
- Q. Did not the power of Great Britain decline greatly in this reign?
- A. Yes. She became less formidable as a military power, and her wealth also suffered considerable diminution.
- Q. What caused this decrease in her military power?
- A. The enormous increase in the armaments of the other great European nations, without any corresponding increase on the part of Great Britain.
- Q. And what circumstances contributed to render Great Britain less wealthy?
- A. 1<sup>st</sup>. The development of industries and manufactures in other countries, and the resulting diminution in the demand for British goods. 2<sup>nd</sup>. The establishment in France, Germany, Russia and Spain of protective tariffs, which practically excluded British goods from their markets. 3<sup>rd</sup>. The donation of bounties by foreign governments to their own manufactures, by which means foreign goods were sold in England at prices with which British manufacturers could not compete.
- Q. Were the English people themselves at all to blame for their country's decline?
- A. Yes. Long-continued prosperity, and immunity from foreign interferences, had rendered the masses of the people unable to appreciate and unwilling to support any foreign policy calling for personal sacrifice on their part.
- Q. Was there not a great war with Russia at the close of Edward VII.'s reign?
- A. Yes.
- Q. How did it originate?
- A. An insurrection broke out in Afghanistan — then a Russian province — and some of the insurgents took refuge in British territory. Russian demanded their instant surrender, and this demand not being promptly complied with, she marched a large army, under the command of General Offskivitch<sup>23</sup>, into India.
- Q. Who commanded the British troops in India?
- A. Field-Marshal Frederics.<sup>24</sup>
- Q. Did the Russians meet with any success?
- A. Yes. Their march into India was so sudden that a body of Cossacks were able to take Peshawur<sup>25</sup> by surprise ; but a week after the Russian army was attacked, and after a terrible engagement defeated, by Marshal Frederics.
- Q. What circumstance prevented the further prosecution of this war?
- A. The outbreak of a revolution in Russia, which necessitated the recall of the Russian army.

## CHAPTER III.

- Q. WHO succeeded Edward VII?  
A. His eldest son Albert Victor I.
- Q. What important Act was passed in this reign?  
A. An Act admitting women to Parliament, and allowing them to take office.<sup>26</sup>
- Q. Who were Jane Smith and Mary Robinson?  
A. Jane Smith was the first lady Prime Minister of England, and Mary Robinson the first English lady Ambassador ; both ladies were remarkable for their wonderful conversational powers.
- Q. Was not Jane Smith connected with a most tragic occurrence in Parliament?  
A. Yes. On her motion an Act was passed permitting Ministers to bring their children into Parliament during debate ; and on one occasion, while Mrs. Smith was in the midst of a magnificent oration, her infant child, who lay in a cradle by her side, was seized with convulsions and expired, to the inexpressible grief of the bereaved lady Minister, who was carried out in an hysterical condition by her sobbing and sympathising colleagues.
- Q. What remarkable conquests were made in Asia by China and Russia in thi[s] reign?  
A. Turkey and Persia were conquered by Russia, and Thibet and Burmah by the Chinese.
- Q. Did the British Government attempt to prevent these conquests from being made?  
A. They did not deem it prudent to interfere with Russia, and therefore contented themselves with congratulating that Government on its accession of territory ; but they instructed their Ambassador at the Court of China to remonstrate forcibly with the Chinese Emperor on his unfriendly conduct.
- Q. What did his Majesty reply to this?  
A. He flew into a terrible rage, and drawing his sabre, told the Ambassador, Mrs. Robinson, that if Great Britain dared to interfere with his arrangements, he would march into India at the head of 3,000,000 men.
- Q. What did Mrs. Robinson reply?  
A. She was so alarmed at the Emperor's vehemence, that she swooned away, and as nothing would induce her again to enter the Chinese Court, she received her letters of recall, and returned to England.
- Q. What remarkable occurrence took place in the financial world?  
A. The failure of the Bank of England for the first time since its establishment.
- Q. To what was this due?  
A. To the long-continued stagnation in British trade.
- Q. What strange phenomenon also was witnessed about this time?  
A. A general exodus of all the Jews from Great Britain.
- Q. Where did they go?  
A. To China, America, and the Holy Land.
- Q. Did not Great Britain lose another of its colonies in this reign?  
A. Yes. The Dominion of Canada in North America separated itself from the mother country, and was admitted into the Republic of the United States of America.
- Q. What induced the Canadians to take this step?  
A. The increasing weakness of Great Britain, and the growing power of the United States.

## CHAPTER IV.

- Q. WHO succeeded Albert Victor I.  
A. His eldest son, Albert Victor II.

- Q. Who were his chief Ministers?
- A. Matilda Greene, Anna Maria Jones, William Beans, and Joseph Buggins.
- Q. Give an account of the famous colliery riots which occurred in this reign.
- A. Fifty thousand colliers took up arms, and, after committing terrible excesses, attempted to march on London.<sup>27</sup>
- Q. Was this daring insurrection successful?
- A. No. The colliers were met at Barnet<sup>28</sup> by a large force of soldiers, volunteers, and armed police, and, after a sanguinary struggle, were completely dispersed.
- Q. What was the cause of this extraordinary rising?
- A. The passage of a Bill by Parliament called the 'Coal Export Prohibition Bill.'
- Q. What was the object of this Bill?
- A. The Government, alarmed at the symptoms of exhaustion displayed by many of the coal-mines, and in order to economise what remained of the mineral, prohibited the exportation of coal.
- Q. How did it affect the miners?
- A. By lessening the demand for coal, in consequence of which hundreds of thousands of colliers were thrown out of employment ; and it was with a view to obtaining the repeal of this Bill that they took up arms.
- Q. What became of the colliers?
- A. The Governments of the United State of America and of the Colony of Australia offered them locations in their territories, and the British Government gave them free passages out.
- Q. How many families left the country?
- A. About two hundred thousand.
- Q. What great loss did Great Britain sustain about the time?
- A. The loss of her Indian Empire, which was conquered from her by Russia.
- Q. How did Russia achieve this conquest?
- A. She had been preparing for it for many years, and when all her measures were ready she sent a memorandum—the famous Constantinople memorandum of history—to the British Government.
- Q. What was the substance of this memorandum?
- A. That the Russian Government could no longer tolerate the disorders which constantly arose in British India, and had taken measures to secure their effectual and permanent suppression.
- Q. Were there any grounds for this complaint?
- A. None whatever—but it was regarded at the time as a masterpiece of state-craft.
- Q. What reply did the British Government make to it?
- A. They replied that they were not aware for the existence of any disorders, but that they would give their immediate and most earnest attention to the matter.
- Q. Was the Russian Government satisfied?
- A. No. Their Ambassador thanked the British Government for their assurance, but informed them that 500,000 Russian soldiers had already been sent to preserve order in India.
- Q. What did the British Government then do?
- A. They made desperate exertions to save India, but their efforts were unavailing : their scattered forces were, after several heroic combats, overwhelmed and annihilated, and in less than two years' time the whole of India was subjugated by Russia, A.D. 1856.
- Q. How were the British prevented from sending assistance to India?
- A. The Russians obstructed the Suez Canal<sup>29</sup> by sinking two large vessels in it.
- Q. Could not the British send troops overland?
- A. No. Egypt was then a French province, and the French refused to allow the British troops passage.<sup>30</sup>

- Q. How long did the Russians enjoy their conquest?  
A. About twenty years.
- Q. What became of India then?  
A. It was invaded by an enormous Chinese host, numbering upwards of five millions of men, and commanded by the celebrated Marshal Chang, who quickly overpowered and drove out the Russians, and declared India to be a province of the Chinese Empire.
- Q. Was not Marshal Chang<sup>31</sup> a very extraordinary man?  
A. Yes. It is said that he could wield a million of men as easily as an ordinary general could wield a battalion.
- Q. What great religious change took place at this time in China and India?  
A. Christianity, which had lately been making rapid strides in the former empire, now spread quickly throughout the latter, and by the year 1981 A.D. all India and China were Christianised.
- Q. Were not the costumes of the British people, and indeed of Europeans as a rule, very ridiculous during the period we have described.  
A. Yes. English gentlemen used to wear enormous cylindrical narrow-brimmed black silk hats, tight-fitting black or dark coloured cloth coats, and bags for their legs, whilst the ladies at one time wore the skirts of their dresses so extravagantly puffed out with hoops that they could scarcely enter a doorway, and a year or two after their costumes were so absurdly tight that they could neither sit down nor walk about with comfort.<sup>32</sup>

## CHAPTER V.

- Q. WHO succeeded Albert Victor II.?  
A. His brother Edward VIII.<sup>33</sup>
- Q. How long did this Prince reign?  
A. Only one year.
- Q. What great event then happened?  
A. The *Revolution* of 1965.
- Q. What was the result of this revolution?  
A. The overthrow of the Monarchy and the establishment of the Republican form of government in its place.
- Q. What became of the King and Royal Family?  
A. They went, accompanied by thousands of loyal subjects, to Australia, where they received a most enthusiastic welcome; and a month after his arrival King Edward was crowned with all due pomp and solemnity Emperor of the Australians.
- Q. Had not the Australian Government meanwhile declared itself independent of Great Britain?  
A. Yes. As soon as they heard of the Revolution they sent delegates to London<sup>34</sup> announcing their secession from the Republic.
- Q. Was there not a rising in Ireland in the first year of the Republic?  
A. Yes. There had been a good deal of agitation going on for what was termed 'Home Rule'<sup>35</sup> for some considerable time in Ireland, and now the agitation broke out into open revolt. A provisional congress was assembled in Galway<sup>36</sup> and delegates were sent to London<sup>37</sup>, first, to demand the formal recognition of the independence of Ireland, and, secondly, to announce the establishment of the Republican form of government in that country.
- Q. How did the British Government treat these demands?  
A. They agreed to them after a long debate.

- Q. How did the Irish people receive the news of the recognition of their independence?
- A. With extravagant rejoicings which lasted for nearly a week. Then a terrible feud broke out between the Republican and Communistic parties.
- Q. What was the result of this feud?
- A. The members of the rival parties blew each other up, and shot each other down whenever they had the opportunity ; and in less than twelve months a dozen governments had been set up and overthrown.<sup>38</sup>
- Q. How long did this terrible state of things last?
- A. Exactly a year. Then the remains of the Irish people petitioned the British Government for re-admission into the Union.
- Q. Did they obtain their request?
- A. Yes. The British Government, out of compassion for their deplorably miserable condition ; good-naturedly suffered them to return into the Union.
- Q. Were there any subsequent risings in Ireland?
- A. No. An adventurer attempted every now and then to create a disturbance, but he was promptly put down by the people themselves.
- Q. How long did the Republican form of government last in England?
- A. About ten years, when it was replaced by what was termed a Social Communes.
- Q. What were the tenets of the Social Communists?
- A. Liberty, equality, fraternity, free love, no marriage, and no religion.<sup>39</sup>
- Q. What were the first acts of the new Government?
- A. The demolition of all the churches and other places of worship, and the prohibition of matrimony.
- Q. What terrible calamity occurred in the year 1981, A.D.?
- A. The destruction of Lomdom by a fearful earthquake, in which eight hundred thousand persons are said to have perished.
- Q. Is not this number probably a great exaggeration of the truth?
- A. Yes. As we have before stated, it is not likely that there were at any time more than half a million of inhabitants in Lomdom. It is, however, quite probable that a hundred thousand persons lost their lives in this awful catastrophe.
- Q. What remarkable change in temperature did Great Britain experience about this time?
- A. An astonishing increase in the degree of cold, so much so that for six months in the year the rivers became unnavigable.<sup>40</sup>
- Q. To what was this change in the climate attributable?
- A. It is impossible to say with certainty ; in all probability it was due either to the completion of the Panama Canal, which took place about the year 1981, or to some slight alteration in the inclination of the plane of the earth's axis. We are inclined to prefer the latter hypothesis, on the grounds that a similar fall in temperature was experienced at the same time in regions one would suppose to have been out of the range of influence of the Gulf Stream.<sup>41</sup>
- Q. What effect had this change on the people of the British Isles?
- A. Very many must have perished of cold and want and hunger — multitudes emigrated to warmer regions — and some, but comparatively few, remained and battled with, and in course of time became inured to, the altered temperature.
- Q. What is the condition of the people of Britain now?
- A. They are a hardy but fierce and barbarous race, with little or no traces left of the civilization for which they were so famous a thousand years ago.
- Q. What are their chief occupations?
- A. Some of them tend herds of sheep and oxen, others cultivate barley, from which they prepare their

national drink — beer and whisky ; whilst others again employ themselves in felling timber — the whole island being covered with forests, chiefly of oak and pine.

Q. Have the women no employment?

A. Yes. They milk the cattle, make a coarse kind of barley-bread ; shear the sheep, and make a rough woollen cloth from the fleeces.

Q. What is the chief amusement of the men?

A. Fencing with their fists, or, as they term it, boxing. They aim blows at each other's noses, and are so expert at this singular pastime, that they have been seen to fence for hours together without a single blow on the nose being recorded.

Q. Have these poor people any religion, or form of worship?

A. For many centuries they seem to have had nothing that could be termed a religion. They used to observe a remarkable custom, however, which was apparently based on superstition. In every house over the fire-place was a small shelf, and on this was placed an object somewhat resembling a Wellington Boot. Every day this thing was taken down, reverently blacked, and then respectfully restored to its shelf. It is not improbable that this custom originated, centuries ago, in a desire to do honour to the philosopher Mr. Wellington Boots, from whose doctrines the English probably derived their extreme immorality.

Q. Are not efforts being now made to reconvert the English to Christianity?

A. Yes. Within the last few years the Chinese Church Missionary Society has spent upwards of 400,000 dollars in endeavouring to reclaim this interesting race. There are now nearly one hundred places of worship in the British Islands, in which upwards of 15,000 persons assemble every Sunday to hear the gospel preached by Chinese missionaries. Several schools have been erected, to which the people flock in great numbers, and display much earnestness, if not aptitude, in their efforts to learn reading and writing.

Q. What do the Chinese Government contemplate doing with the British Islands?

A. They contemplate using them both as a naval depôt and as a penal settlement ; and it is hoped and believed that, in a few years' time, the blessing of Chirstianity and civilization will once more be diffused throughout these interesting islands.

THE END.

- 
- 1 この“Lang-Tung”は、“Chinese Lantern (提灯)”との語呂合わせであろう。
  - 2 “Sing and Hang”は、一見、中国人の名前のようにもみえるが、おそらく歌って(sing)ぶらぶらすごす(hang)という意だろう。
  - 3 中国人風の翻訳者の名が“Yea(はい)”というのは、十八世紀からこのかた中国のステレオタイプとなっていた「マンダリンの首振り人形 (Nodding Mandarin)」を連想させる。
  - 4 ここから、おそらく 1881 年 8 月に書かれたとみて差し支えないだろう。
  - 5 正確には、ヴィクトリア女王の即位は 1837 年からである。
  - 6 もちろん大英帝国の首都は London であるが、途中から“London”となり、最後にまた“London”となるなど、不徹底な表記になっている。
  - 7 ロンドンの人口は、いわゆるグレーター・ロンドン全体だと 1881 年の調査で 4766661 人であり、ここにある 400 万人というのは間違いではない。いうまでもなく、それが虚偽としか思えないほど衰退したということであろう。
  - 8 このようにヴィクトリア女王が、インド帝国の皇帝を兼ねるようになったのは、本書刊行の四年前、1877 年からのことである。
  - 9 第一次アヘン戦争(1840-1842)を指しているが、ここでは勝利した国が中国に変更されている。

- 10 クリミア戦争は1853年に始まり、翌1854年から英仏が参戦した後、1856年に終了した。ここでの記述は史実通りになっている。
- 11 Fenian とあるべきところだが、Fiendish(邪悪な)とかけて Fiendian と表記しているのだろう。なお Fenian は、1858年に結成された Irish Republican Brotherhood こと、通称 Fenians の団員である。ここでは彼らの独立運動が、伝染病のように描かれたうえ、あたかもすぐにおさまったかのように描かれている。
- 12 このようなダイナマイト・テロは、注35にある“Home Rule”運動の高まりとともに、1880年代を通じて英国の新聞や雑誌で誇張して描かれ、ダイナマイトを手にした猿のようなアイルランド人は、長くステレオタイプとして流布することになる。
- 13 それぞれ、Peel, Palmerstone, Gladstone, Disraeli をさす。なお Disraeli を Dizzy と記すのは、当時のジャーナリズムでしばしばみられた。
- 14 この記述のとおり、ヴィクトリア女王のあと、エドワード七世が即位した。在位期間は、1901年から1910年までである。
- 15 実際、ロシアは1880年から、カスピ海を横断してアフガニスタンの北部、西トルキスタンまで鉄道の延長に着手しており、当時の英国でもその様子が報じられていた。
- 16 “Mihailovsk”とあるが、これはカスピ海近くの町、Mikhailovsk のことだろう。
- 17 “Candahar”はいまでは Kandahar と綴るが、アフガニスタンの当時の都。第二次アフガン戦争(1878-80)で、Roberts が陥落させ、戦争を終結させたことで英国ではつとに有名である。この戦争の結果、アフガニスタンは実質、英国の保護領となった。本書刊行のわずか一年前のことである。
- 18 Amcer はイスラム教国の首長のことで、Amir と綴る。英保護領となった1880年、後に“*Iron Amir*”と仇名される Abdur Rahman が即位し、英国を後ろ盾にしながらい現在のアフガニスタンの骨格が作られていった。ここで描かれるような反英的な態度はむしろ許されなかったといえるだろう。
- 19 “Marqus”とあるが、Marquis の誤植と思われる。
- 20 それぞれ、Hartington, Chamberlain, Dilke をさす。Hartington は、Haughty(尊大な)-tone(口調)、Chamberlain は、Chamber(下院・部屋)-linen(亜麻布・下着)と読めるように誤記・誤伝されている。
- 21 初代 Duke of Wellington のことを指すか。Wellington Boots とは、このナポレオンを破った軍人にちなんだ長靴だが、ここではそれが哲学者の人名として記述されている。
- 22 ここは、まさに本書と同時代であった第一次ボーア戦争(1880-1881)での敗退をふまえている。英国は1877年にトランスヴァールを併合したものの、反乱をおこしたボーア人との戦いに敗れ、1881年3月にグラッドストーン首相は独立を承認するプレトリア条約に署名している。
- 23 “Offskivitch”は、おそらく架空の人物とおもわれるが、ほのめかされている事物も含めて不詳である。
- 24 この“Field-Marshal Frederics”は、注12で言及したカンダハール包囲に功のあった Frederick Sleight Roberts を指すか。なお、General Roberts が、Field-Marshal こと陸軍元帥に昇格したのは、1895年のことである。
- 25 Peshawur は、現在パキスタンにあり、“Peshawar”と綴られている。当時は英領インドにあったが、そのころからアフガニスタンとの国境に近かった。アフガニスタンがロシア領になれば、近接するこの都市がロシアに急襲されるというわけである。
- 26 なお英国で、“Sex Disqualification Removal Act”が議会を通過し、女性への職業解放が行われたのは1919年のことである。なお同年には、女性初の下院議員 Nancy Astor が当選している。
- 27 最初に誤記・誤伝されたとおり“Londom”とあるべきところなのだろうが、ここでは“London”となっている。

- <sup>28</sup> “Barnet”は、ロンドンの北、ハートフォードシャーの地名。
- <sup>29</sup> ディズレーリ内閣がフランスからスエズ運河の株を買収するのに成功したのは、本書刊行の六年前、1875年のことである。
- <sup>30</sup> ここでは、エジプトはあくまで英仏の覇権争いのなかでとらえられており、民族主義への警戒はみられない。それは本書が、1881年の9月のいわゆるアラビー・パシャの乱以前に書かれたことを示す証しでもあるだろう。英国は、この反英・反仏運動を押さえ込んで、翌1882年にエジプトを保護領とすることになる。
- <sup>31</sup> このChangも架空の人物とおもわれるが、ひょっとすると、当時しばしば話題になっていた李鴻章 (Li Hung Chang) から連想したものなのかもしれない。
- <sup>32</sup> これと似たような記述が、Walter Savage Landor の“Emperor of China and Tsing-Ti”(1846)にも見える。そこでは、英国のブーツの窮屈なことと味気なさを二人の中国人が哀れんでいる。
- <sup>33</sup> 偶然の一致ながら、ほぼこの記述どおり、エドワード八世は、即位後わずか11箇月で退位することになる。シンプソン夫人との結婚問題が理由であった。同じ1936年に、弟がジョージ六世として即位するが、ピーター・タウンゼントの『最後の皇帝—大英帝国衰亡史』(1975)にあるように、彼こそは、インドの独立を承認するなど、大英帝国の衰亡を目の当たりにした「最後の皇帝」となった。
- <sup>34</sup> ここでも、最初に誤記・誤伝されているとおり“Londom”とあるべきところなのだろうが、“London”となっている。
- <sup>35</sup> “Home Rule”とは、アイルランド自治法案のことであり、1877年には Charles Parnell が“the New Home Rule Party”の党首となり、積極的に運動を展開した。しかし、この“Home Rule”は、否決され続け、ようやく可決されたのは1914年のことである。なお、パーネルは、本書刊行直後の1881年10月に、脅迫の嫌でキルメイナム刑務所に投獄された。
- <sup>36</sup> “Galway”は、アイルランドの西海岸の州および州都。Parnell が失脚する原因として、Katherine O’Shea との関係はよく知られているが、彼女は、Galway の議員である Willie O’Shea の妻だった。
- <sup>37</sup> ここも、最初に誤記・誤伝されたとおり“Londom”とあるべきところなのだろうが、“London”となっている。
- <sup>38</sup> このように革命を無秩序と内乱の連続として描くのは、フランス革命(1789)やパリ・コミューン(1871)などに対する典型的な英国の風刺方法である。
- <sup>39</sup> 注33と同じく、これも英国の典型的な革命観といえる。
- <sup>40</sup> この記述は、1881年1月に英国が記録的な寒波に見舞われ、ロンドンの交通機関が大雪で麻痺した事件と無関係ではないだろう。架空戦記小説『ドーキングの戦い』(1873)にならって、1911年の未来に息子へとその恐怖を語る形式の記事がすぐに書かれたほど、その衝撃は大きかった。無署名の“The Great Snowstorm of London”, *Spectator*, 29 January 1881: 146-148 を参照。
- <sup>41</sup> 高緯度にもかかわらず英国の気候が温暖なのは、地軸の傾きとメキシコ湾流の賜物であるということが、十九世紀中盤には英国でもかなり広く知れ渡っていた。その一方で、当時の英国では、氷河時代の発見とあいまって、気候が逆転する可能性もしばしば論じられていた。このパナマ運河開通によるメキシコ湾流の変化と、それにとまなう英国の寒冷化も、1860年代から70年代にかけて英米の論壇を騒がせた主題の一つである。そして本パンフレットが刊行された1881年の初めには、フランスのレセップスによってパナマ運河が起工されている。そのためもあってこのパナマ運河と英国の寒冷化という主題は、1885年及び1890年の『大英帝国衰亡史』でも反復されることとなった。